

## 潮 流

## 『ラデツキー行進曲』とヨーロッパの地政学

主席研究員 山口 勝義

つい100年ほど前まで、ヨーロッパにはある特異な国家が存在していた。それは、ハプスブルク家のオーストリアである。当時はオーストリア帝国の皇帝である同家の当主がハンガリー王国の国王でもある二重帝国を構成していたが、このオーストリア＝ハンガリー帝国の特異性は、何よりもそれが多民族国家であり、多宗教、多文化の国家であった点にある。そしてこの帝国は、その領土にボヘミア、スロヴァキア、ボスニア・ヘルツェゴビナなどを含み、東端ではロシア帝国にも国境を接する、中東欧に位置する大国であった。

50年近くの長期にわたりこの二重帝国の皇帝とした君臨したフランツ・ヨーゼフ一世は、多民族国家の理念を尊び国内の融和に腐心した。しかし、国内では次第に民族主義が高まり、様々な摩擦が現れてきた。一方、対外面では、執拗に領土拡張政策を採るロシア帝国との間で軋轢が生じ、また同時に、衰退しつつあったオスマン帝国のバルカンにおける領土の獲得を巡って、ヨーロッパの強国との衝突が続いた。こうして各所で緊張が強まるなか、オーストリア＝ハンガリー帝国は、サラエボ事件を機にセルビアに対し宣戦を布告し、第一次世界大戦に突入していった。ヨーゼフ・ロートの『ラデツキー行進曲』は、この間の、オーストリア＝ハンガリー帝国が崩壊に向かう道筋を背景として、主人公の1族3代にわたる紆余曲折の人生をたどった長編小説である。

第一次世界大戦では、主戦場となったヨーロッパの惨禍は想定外に拡大し、また、二月革命で倒れたロシアを加えればドイツ、オーストリア＝ハンガリー、オスマン、ロシアの4帝国が崩壊に至ったことで、国際社会には大きな影響が及んだ。戦後処理においては従来のヨーロッパ型の勢力均衡論は脇に置かれ、国際舞台に初めて登場した米国が強く支持した民族自決主義の考え方が、秩序回復のための主要な基準とされた。しかしながら、新たな国境の線引きではその適用は不徹底に終わり、バルカンを中心に、民族紛争の火種をその後に残すことになった。また、敗戦国であるドイツについては、オーストリア＝ハンガリー帝国の解体と革命の勃発に伴うロシアの後退で東側の脅威が取り除かれ、地政学的には戦前よりもむしろ強大化するという、皮肉な結果を招いた。

こうして見ると、『ラデツキー行進曲』がエピローグを迎え、やがて第一次世界大戦が終結しこの二重帝国が崩壊するとともに、新たに、ヨーロッパの中央部に地政学的リスクの大きな巣が生じたことになる。そして、その後のヨーロッパにおける主要な歴史上の展開は、その多くが、もとはと言えばここでの地政学的リスクの変動に多少なりとも関わりを持つように考えられる。それは、バルカンにおける民族間の衝突のみならず、例えば第二次世界大戦におけるドイツの東方侵攻や、戦後のソ連による中東欧支配などである。ドイツによる覇権回復への強い警戒感が主要な推進力となった欧州統合の取り組みも、また同様である。さらに時代が進み、現在進行中である、ロシアが引き続き影響力の伸張を図るバルカンへの欧州連合（EU）の拡大や、かつて大陸の紛争からは距離を置き「光荣ある孤立」を誇った英国によるEUからの離脱などについても、これらは進むべくして進む、ヨーロッパの地政学を巡る同じ歴史の一コマに過ぎないように思われてくる。